

4. 遺物

(1) 概要

今年度発掘調査においてB地区からは280コンテナに換算して約2.5箱分の遺物が出土した。遺物の種類は須恵器・土師器・土師質土器・鉄製品等で、時期は9世紀中葉～12世紀である。B地区出土遺物に関しては平成17年度報告内容とほぼ同じ状況であるため、今回の報告書では割愛した。C地区からは、遺物が破片にして約30点出土した。古代の遺物としては須恵器・土師器が出土した。近代の遺物としては染付碗が出土した。過去の発掘調査同様瓦は出土しなかった。

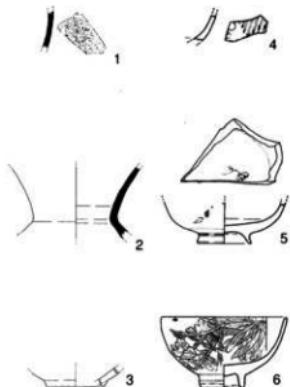
また、平成17年度にB地区僧房跡より出土した須恵器多口瓶について生産地の分析を行った。

(2) C地区出土遺物(第13図)

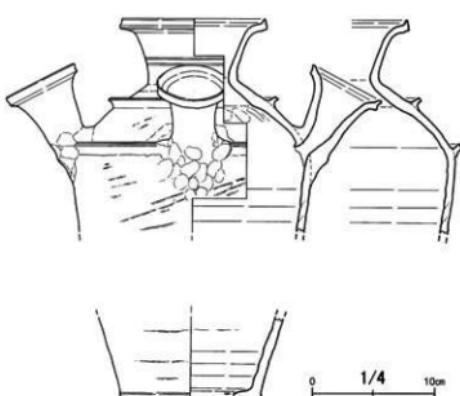
C地区からは須恵器・土師器が出土した。遺物は石組造構内、石組造構の基盤層、流土中より出土した。石組造構内は石と石の間に土が充填されておらず空洞のある状態であったため、石組造構構築後に遺物が落ち込んでいる可能性がある。

1は石組造構5付近で表採した、須恵器壺の体部片である。外面は4mm角の格子叩き痕の後指ナデを施し、内面は指ナデを施す。胎土は微砂粒を含み、内面は暗セピア色、表面は暗灰色を呈する。

2は4トレンチ②層(石組造構の基盤層)から出土した、須恵器壺である。頸部から口縁部にかけて残存する。外面には自然釉付着。内外面ともヨコナデを施す。胎土は微砂粒を含み、内面は暗セピア色、表面は暗黒灰色を呈する。時期は9世紀後半頃と考えられる。



第13図 C地区出土遺物実測図



第14図 中寺廃寺跡出土多口瓶実測図

3は4トレンチ①層（流土）から出土した、土師器碗の底部である。小さく低い高台を貼り付ける。時期は12世紀後半と考えられるが、かなり摩滅しているため注意を要する。

4は石組造構2の中央部礫中より出土した、肥前系磁器碗の体部片である。内面・外面共に施釉・染付を施す。時期は18世紀後半以降である。

5は石組造構2の中央部礫中より出土した、肥前系磁器の碗である。「ハ」の字形の高台を有する。時期は18世紀後半～19世紀初頭である。

6は石組造構2の落石除去中に出土した、磁器碗である。内面・外面共に蟠盤転写による染付を施す。時期は明治～大正時代にかけてである。

（3）中寺廃寺跡出土多口瓶類例調査成果

中寺廃寺跡では平成17年度に行ったB地区第2テラス発掘調査において、僧房と考えられる掘立柱見物跡に柱穴から須恵器多口瓶が出土した（第14図）。多口瓶は類例調査により兵庫県相生市付近の釜跡において製造されたものであることを確認していた。今回は兵庫県教育委員会森内秀造氏の協力のもと、相生市付近の各窯跡から出土した遺物を実見しながら、中寺廃寺跡出土多口瓶との比較を行い、中寺廃寺跡出土品の生産地の検討を行った。

検討の結果、表面の色調・焼成は同じ窯跡で焼成されたものでも個体差が大きいため明確にどの窯で製造されたものは確定できないが、中寺出土品とほぼ同様の色調・焼成を示す須恵器が各窯跡で出土しているため、相生市付近の窯で焼かれたものであると考えられる。

形状の分析からは、中寺出土品は相生産須恵器の古い要素と新しい要素が折衷していることから、9世紀後半～後半の窯跡（西後明41号窯・入野6号窯・落矢ヶ谷2・10号窯と同時期の窯）で焼成された可能性が高いが、特注品のために固体の精製度に多少差がある可能性を含め、9世紀中～10世紀前半の窯跡（西後明23号窯・西後明41号窯・入野6号窯・落矢ヶ谷2・10号窯・乳母ヶ懐3号窯と同時期の窯）で焼成されたものと考えられる。

各要素	古	新
口縁端部	断面三角形	下端を外側へ拡張する
頭部	器厚にメリハリがあり、直線的に開く	器厚は一定で曲線的に開く
タガ位置	高い	低い
タガ形状	高い、角を鋭くつまみ出す	低い、角が丸い
肩の張り	強い	弱い
体部形状	体部最大径が上位	体部最大径が中位

年代	窯跡名	各要素					
		口縁端部	頭部	タガ位置	タガ形状	肩の張り	体部形状
840年 ～ 870年	西後明23号窯	古	古	古	古	古	古
	西後明41号窯	古	古	古	古	古	古
	入野6号窯	古	新	新	古	新	新
9世紀後半	落矢ヶ谷2・10号窯	新	新	新	新	新	新
10世紀前半	乳母ヶ懐3号窯	新	新	新	新	新	新

9世紀中～ 10世紀前半	中寺庵寺跡出土多口瓶	古	古	新	古	古	古
-----------------	------------	---	---	---	---	---	---

第3表 相生産須恵器双耳壺と中寺庵寺跡多口瓶の新・古要素

※中寺庵寺跡出土多口瓶の要素

色調：灰白色、直径約1mmの黒点が少量入る。

焼成：高温（約1,000～1,100°C）で焼成され、非常に堅緻である。

表面：窯での焼成時に灰が降りかかり、うすいクリーム色の自然釉がかかる。

一方向から灰がかかり、自然釉の厚さに差がある。

形状：表面…タタキ目をなで消す。

口縁端部…するどくつまみあげる。

タガ位置…肩部及び、肩部と頭部との中间に位置する。

タガ形状…断面長方形、角はするどくつまみ出す。

肩の張り…弱い、体部最大径は体部上位。

5. 文献・聞き取り調査

（1）概要

平成 16 年度は中寺廃寺跡が所在する旧村である造田村の庄屋文書『西村家文書』中の「日帳」の調査を行った。その結果、天保 6 年(1835) 2 月の条において、造田庄村屋と高松藩の役人の命を受けた鷹足郡の大庄屋との間で行われた文書のやり取りの中で、「中寺」という記載を確認した。文書の内容は大庄屋が出した藩主が鷹狩の際に通行する道沿いに所在する名所・旧跡の照会と、造田庄村屋からのそれに対する回答である。内容から当時中寺廃寺跡はすでに廃絶していたが、通行する道から 2 町 (218m) の距離に所在すると認識されていたことを確認した。

平成 17 年度は近世段階における中寺廃寺跡周辺の古道の復元や当時の人々の中寺廃寺跡に対する認識の解明を目的に、引き続き『西村家文書』の調査を実施し、『西村家文書』中の殿様鷹野関連史料内の、平成 16 年に未報告であった箇所について釈文と読み下し文、及び造田村の庄屋が提出した藩主が鷹狩を行う際に通行する道筋の絵図を掲載した。

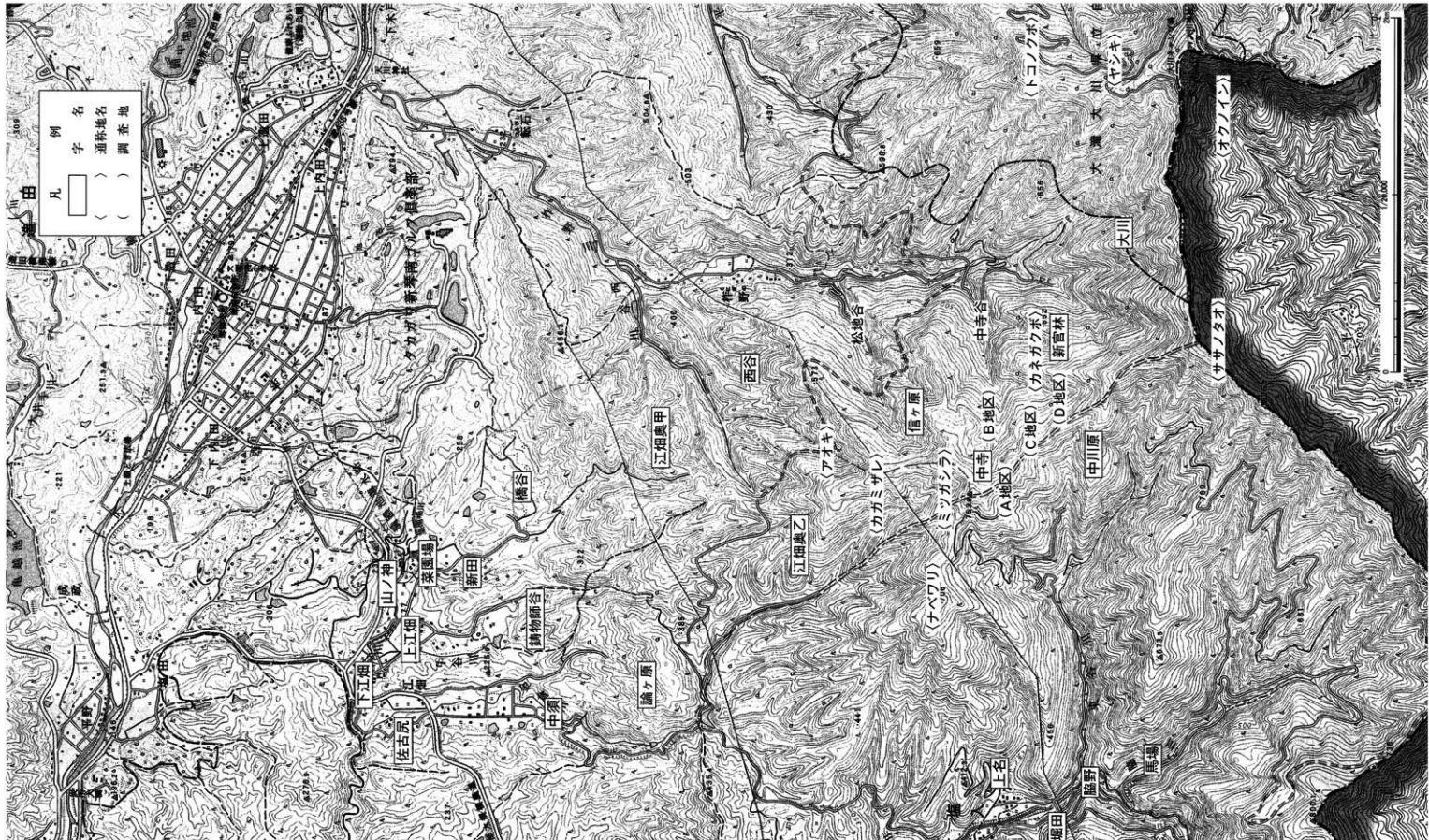
平成 18 年度は中寺廃寺跡付近の地名調査を実施した。その結果、特に中寺廃寺跡に関係が深いと考えられる地区に関して中寺廃寺跡に関する伝承・地名・古道等についての聞き取り調査を実施した。

（2）中寺廃寺跡周辺の仏縁地名

地籍図・伝承などを元に、中寺廃寺跡付近に分布する地名を図版 15 に記した。中寺に関係する地名としては江畑、中寺谷、松地谷があげられる。字名としては信ヶ原、菜園場があげられる。中寺に関係する通称地名としてはカネガクボ、オクノインがあげられる。

江畑、菜園場は中寺の僧侶がここで菜園を作っていたというまんのう町江畑地区的伝承に基づくものである。中寺、中寺谷は現在までの発掘調査成果によりここに古代山岳寺院の所在を確認している場所であり、寺院の名称が中寺であった可能性を示す。松地谷という地名は松地（まつじ）＝末寺であると言う伝承がまんのう町琴南地区に残っており、中寺の末寺にあたる寺がここにあった可能性を示す。信ヶ原（のぶがはら）は野辺が原（のべがはら）とも呼ばれ、死者に対する野辺送りがここで行われたという伝承が付近の集落に残っている。カネガクボは中寺にあつた鐘が埋められた場所であるという伝承がまんのう町江畑・琴南地区、徳島県三好市大平地区に残っている。オクノインは徳島県三好市大平地区の伝承によると行場であったとされている。オクノインには現在大きな岩の陰に御神体が祀っているが、中寺が大川神社の神宮寺であったという伝承も含めて中寺・大川神社双方に関係のある場所である可能性がある。

また、ナベワリは気温が低いために鍋が割れるほどであるからといいうまんのう町仲南地区的伝承に基づいているため、現時点では中寺に関係するとはいえないが、中寺に近接し平坦部を有す



第15図 中赤鹿赤鱗固刃の地名分布図

るため、中寺に關係する遺物の散布地である可能性があり今後調査を進めて行きたい。

中寺周辺の仏縁地名の範囲を見ると中寺からまんのう町江畠地区・塩入地区・柞野地区・徳島県三好市大平地区にかけて分布することが確認できる。また中寺の里坊をその起源とするまんのう町周辺の寺院がこの地区に關係が深い(表4)。そのため、麓から中寺にいたる道や、中寺に關係した諸施設がこの地区を中心に存在すると考えられる。

寺院名	住所	寺院の概要
淨楽寺	丸亀市垂水町	藤田山城守頼雄、天台宗に属し塩入に開く。その子西園・永禄年中(1559)に淨土真宗に改宗。9代目正円の時に現位置に移転。 塩入地区的伝承によると淨樂寺は元々中寺にあったとのこと。現在でも塩入には淨樂寺の門徒が三十数件ある。
願智寺	丸亀市垂水町	天文年間(1532)沙門蓮海が江畠に淨土真宗の庵をむすぶ。江畠地区的伝承によると願成寺は元々中寺にあったとのこと。現在でも江畠には願成寺の門徒が十数件ある。
永覺寺	綾歌郡綾川町東分甲	「永覺寺縁起」によると永覺寺の開基空円(大和の法藏寺)が天禄2年(971)に大川宮の別当職をしたと伝えている。まんのう町中通に所在したが、天正年間に火災にあい現在の土地に移る。現在でも琴南地区には永覺寺の門徒が多い。
称名寺	まんのう町内田	大川中寺の一房で柞野の松地にあったが造田に移ったとされる。長禄年間(1457)に淨土真宗に改宗し内田に移転する。琴南地区的伝承によると淨樂寺は元々中寺にあったとのこと。
教法寺	徳島県三好郡 東みよし市足代	大平地区的伝承によると、もともと中寺にあったが、大平の庵に移り、その後現在の場所に移ったとされる。

第4表 中寺を起源とする寺院(『琴南町史』1986より)

(3) 聞き取り調査の成果

地名調査と併行して、中寺廃寺跡に関する聞き取り調査を実施した。聞き取り調査は中寺廃寺跡周辺のまんのう町江畠地区・塩入地区・柞野地区・徳島県三好市大平地区について各地区の歴史に詳しい方や、各地区の住民の方を中心に調査を行った。その結果、近代以前、江畠地区・塩入地区・柞野地区から大川山に登る際には中寺廃寺跡付近を経由していたことを確認した。また、中寺に関する新たな伝承を確認した。以下、今回の調査の成果を提示する。

No.	1
調査対象者	まんのう町満濃地区郷土史家
調査日	平成18年6月23日
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・昔、畑のことを菜園場・菜園地といっていた。江畑地区の言い伝えでは、中寺の僧侶が江畑の菜園場川の付近で畑を作っていたとされる。 ・江畑は西谷・中谷・東谷にわかれ、東谷から中寺へ上っていったとされる。

No.	2
調査対象者	まんのう町仲南地区郷土史家
調査日	平成18年6月27日
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・尾ノ背山周辺の集落で雨乞いをする際は、尾ノ背神社の井戸の水を使う。 ・当時はヒノキ・杉などはこの地方にはあまり生えていなかったため、中寺は桧皮葺ではないと考えられる。ちなみに、炭焼きなどでは20年周期で木を切るため、それまでに種を落とさない種類の木は廃絶する。 ・当時は物が移動するより人が移動した。明治までロクロ師が山間の村々を回り、木の器を作り歩いていた。 ・塩入から中寺を通って大川神社に至る山道がある。また、江畑から中寺を通る。

No.	3
調査対象者	まんのう町満濃地区江畑住民
調査日	平成18年6月28日
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・丸亀市垂水町の願請寺の仏像は中寺から降りたとされる。 ・江畑・柞野・江畑の谷の奥には「三好」姓の古くから続く家があり、中寺と何らかの関係があったと考えられる。 ・江畑から中寺に上る道は、東谷から上がる菜園場川→しょうぼおか→七曲り→一升水→かねがくぼ→中寺という道と、西谷から上がる丸太小屋→かがみざれ→じやくぼ→三つ頭→中寺という道がある。

No.	4
調査対象者	徳島県三好市大平地区郷土史家
調査日	平成 18 年 7 月 6 日
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大平地区から笹ヶ多尾までの尾根上には、湧き水が豊富である。 ・ 大平から仲南・満濃・琴南へ炭を運搬する際の道は大平から笹ヶ多尾を通り、北東へ伸びる尾根上の道からなべわり街道・七曲りへ分岐した。 <ul style="list-style-type: none"> ① 仲南塩入へと抜ける「なべわり街道」は入口から植林地を経由し、塩入の奥へと抜ける。 ② 満濃・琴南へは「七曲り」を通った。「七曲り」とは七回曲がる道のことで途中に平地のそばを通った。「七曲り」を歩く間は「ここは中寺という古いお寺があったところなので、敬虔な気持ちで通うこと」とされていた。歩く間は大川山山頂がよく見え、松林の間を抜けた。七曲りの終点からは鉄塔道を通る。途中から柞野谷へ至る道と江畑へ至る道に分岐する。 ③ 江畑へは鉄塔道より尾根を伝い降りる。江畑へは入口から小走りで 1 時間程度かかった。 ・ 大正の終わり頃、中寺に宝が埋まっていると聞いた人がいて、大平に泊まりながら発掘していった。「釣鐘のようなものをみつけた」と言っていた。 ・ 笹ヶ多尾と大川神社の間に木製の鳥居が昭和まであった（※江戸時代の絵図でそれらしい鳥居を確認）。また、その付近に礎石らしい石が点在していた。 ・ 大平にある山の神の場所には、その昔、中寺が焼き討ちにあった際に移ってきた庵があり、庵は将軍家光の時代に足代（徳島県三好郡東みよし町）へ降り、現在の教法寺となった。

No.	5
調査対象者	まんのう町仲南地区塩入のなべわり街道（中寺へ至る道）の付近の住民
調査日	平成 18 年 7 月 25 日
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもが生まれた際、なべわり街道を通り、中寺を経由し、大川神社へお礼参りをした。 ・ なべわり街道は、①東に向かい南の尾根に上がる尾根伝いの道（現在鉄塔道がつく）、②東谷川沿いの谷を進み国有林の防火帯から上がる道の 2 本があり、炭の運搬路や大川神社へ至る参道として頻繁な交通があった。 ・ 昭和 30 年頃に炭を大平から塩入まで運搬していた。1 俵運ぶと 50 円の収入となつた。1 日 2 往復が時間的に限度であった。当時塩入の人々は皆山で炭焼きを行い、中寺付近や遠く徳島大平でも焼いていた。 ・ 子どもの頃、家が米の問屋をしており、借耕牛の関係者でにぎわっていた。丸亀からきた農家への中継ぎ役と徳島から二本杉を越えてきた（現在の県道 4 号線）牛飼いが証文を取り交わしていた。春と秋は朝から晩まで賑い、年間を通して 100 頭ほどの牛が行来していた。

No.	6
調査対象者	琴南地区郷土史家
調査日	平成 18 年 10 月 28 日
内容	<ul style="list-style-type: none"> 中寺廃寺跡の C、D 地区間の尾根道の途中に大杉があり、そこから 100mほど下りたところに、礎石が点在する平坦地がある。そこから少し下ると鐘ヶ淵に至る。 昔、柞野谷に住んでいた炭焼きを生業とした人が中寺の付近に石垣があると言っていた。

No.	7
調査対象者	まんのう町琴南地区住民
調査日	平成 18 年 12 月 21 日
内容	<ul style="list-style-type: none"> 中通から大川山に登る途中、広域林道との分岐をこえた辺りは「ヤシキ」とよばれ、石垣や平坦地がある。 さらに登った所の中通勝浦線との分岐の谷側は「トコノクボ」とよばれている。 「トコノクボ」の付近から「ヤシキ」にかけて、導水施設のようなものがあり、「トコノクボ」付近で小川から取水している。

No.	8
調査対象者	まんのう町満濃地区江畠住民
調査日	平成 18 年 12 月 23 日
内容	<ul style="list-style-type: none"> 中寺が起源とされる丸亀市垂水町の願成寺は元々江畠にあったとされ、今でも願成寺の門徒が江畠地区に多い。 「カネガクボ」には黄金の鳥居が埋っているといわれ、100 年ほど前、徳島から人が掘りにきたが、なにも見つからなかった。そのため現地に掘った跡が残る。 江畠地区「アオキ」の近くに瓦が落ちている谷がある。 江畠西谷から中寺へ登る途中、現在丸太小屋が立っている場所から登ったところは、急斜面に石が散乱し滑って危ない場所があり「カガミザレ」と呼ばれている。また、丸太小屋より奥に「キジヤシキ」という地名があり、屋敷の跡らしい地形が残っている。そこは本地師が住んでいたとされる。 江畠から中寺に登るときは「七曲り」を通った。現在江畠から柞野へ向かっている広域林道の終点からさらに奥に言つた場所で「七曲り」に出る。 「七曲り」の中寺側の終点付近には「一升水」と呼ばれる直径 50 cm、深さ 30 cm ほどの土坑あり水がかけたことがない。 昔、中寺の僧に恋をした尼がおり、僧侶についていこうとしたが、大川山は女人禁制であったために結界の岩のところまでしかいけなかつた。中寺と大川山の間にその岩があり「尼の泣き石」と呼ばれている。 江畠の中谷・東谷から中寺へ登る道はネコゴマ（昔の一輪車）をおして上がるほどしっかりした道であった。東谷から上がる道は幅が狭く急斜面であった。

6.まとめ

(1) 中寺廃寺跡C地区で確認した石組遺構に関する検討 その1

①はじめに

平成18年度に実施した中寺廃寺跡C地区の発掘調査において、人頭大と拳大の角礫で構築された石組遺構を計16基検出した。その内3基の石組遺構については発掘調査を実施し詳細な位置、構築方法、規模が判明し、未調査の石組遺構についてもデータを取得した。

ここでは中寺廃寺跡C地区で確認した16基の石組遺構について、石組遺構にはどのような特徴があるかを検討した後、古代・中世の類似例を提示し、中寺廃寺跡石組遺構と比較し、A・B地区で検出した塔跡、仏堂跡、僧房跡などと同時期のものであるかどうか検討を試みる。

②石組遺構の検討

まず、石組遺構の構造に着目してその性格を検討する。

今年度調査を行った石組遺構の平面形は一辺が約1.0～1.6mを測る方形を呈し、四方向の側壁に、ほぼ垂直に人頭大亜角礫を積み、内部には拳大の角礫を充填されている。側壁は雜に積まれ石と石の間に隙間が開いていることから、石組遺構上部から圧力が加わった際に耐えるだけの強度ではなく、石組遺構上部に重量のある構造物が乗る基壇等とは考えにくい。また石組遺構内部・下部において石室・土坑等の内部施設が確認できず、骨壺・焼土等の出土しない状況からは、石組遺構が墓や経塚などの内部主体を持つ遺構の外表施設であったとも考えにくい。よって、石組遺構が何らかの施設に伴うものではなく、単体で意味を成すものであると考えられる。

統いて、石組遺構の分布と基底石の方向に着目する。

石組遺構は中寺廃寺跡の付近ではC地区のみで確認している遺構である。今まで中寺廃寺跡付近の山中は詳細な踏査を行っているが、類似する遺構は確認できない。また、C地区内においても、南側に伸びる尾根と北西方向に低く伸びる尾根の間の緩やかな傾斜の谷状地形といった非常に限定された場所において確認している。石組遺構の配置上の規則性はないものの、選地に関しては非常に徹底されていることがわかる。

それぞれの石組遺構は平面形が方形であるが、石組遺構基底石の角度を計測したところ、

①石組遺構1・2・4・6・10・13 … 基底石角度N-39° -W～N-61° -W

②石組遺構7・9・14・16 … 基底石角度N-6° -W～N-8° -E

の2グループに分けることができる。これらはそれぞれ

①C地区石組遺構集中部からA地区第1～9テラスへの角度 … N-33° -W～N-57° -W

②C地区石組遺構集中部からB地区第1～3テラスへの角度 … N-2° -E～N-8° -E

にはほぼ合致し、石組遺構はA地区の方向とB地区の方向を向く2グループに分類でき、石組遺構はA・B地区の方向を意識して構築されたと考えられる。中寺廃寺跡A地区は塔跡・仏堂跡が所在する中寺の中心部であり、B地区は仏堂跡・僧房跡が所在する僧侶の修行と生活の場であることを現在までの調査により確認している。C地区はA・B地区を意識しながら、別機能を担った地区であると考えられる。

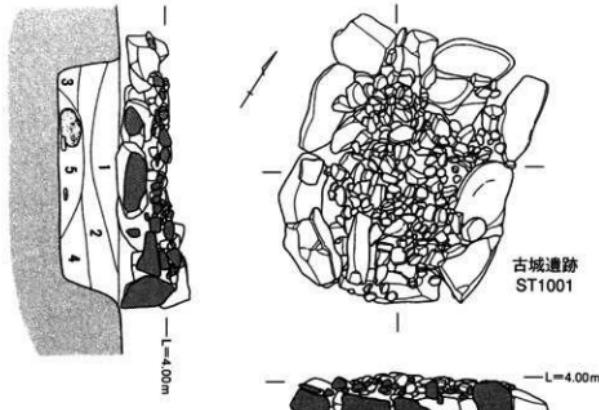
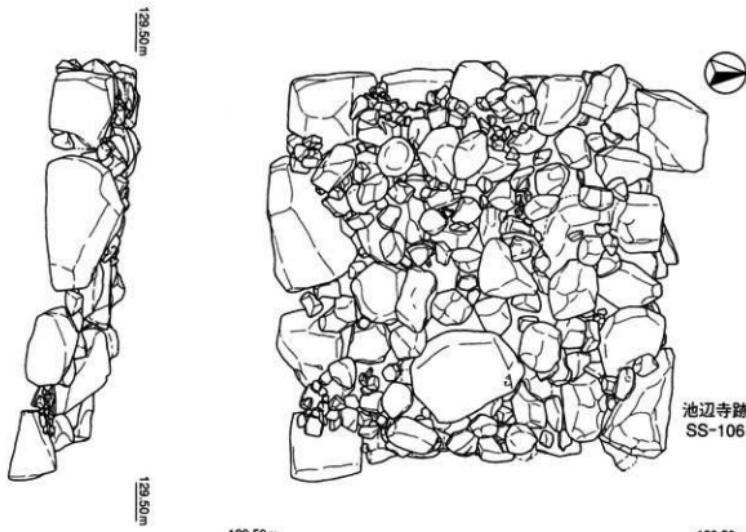
現在までに調査が行われた他の古代山岳寺院遺跡の調査成果によると、静岡県湖西市大知波峠廃寺跡では南東に開けた谷懐の最奥部、熊本県熊本市池辺寺跡においては南東に向く谷懐に立地する建物が立地する。この状況は、中寺廃寺跡A・B・C地区と同様の立地である。また、寺院内の空間構成に着目すると、熊本県熊本市池辺寺跡では仏堂跡・僧房跡と考えられる礎石建物跡・塔跡・石組遺構・祭祀遺構など、静岡県湖西市大知波峠廃寺跡では仏堂跡・僧房跡と考えられる礎石建物跡や掘立柱建物跡・池跡・巨石などが確認されており、寺院内において生活空間である僧房、修行の場である仏堂、祭祀のできる石組遺構・巨石などといったあらゆる機能をもつ施設が谷を挟んで向かい合う状況が認められる。中寺廃寺跡C地区の石組遺構が示すA・B地区への意識は、他の古代山岳寺院同様谷を挟んで機能の違うA・B・C地区が関連しあう地区であったと示すものであると考えられる。

③ 古代・中世の石組遺構との比較

今回の調査成果によると、石組遺構内部・下部より遺構の性格を示す施設・遺物の出土が未確認であった。そこで、古代・中世に属する遺跡において、中寺廃寺跡で確認した石組遺構と類似する構造を持つ遺跡について検討する。

古代の石組遺構については、中寺廃寺跡と同時代の山岳寺院遺跡である熊本県熊本市池辺寺跡において、中寺廃寺跡で確認した石組遺構に類似する遺構が確認されている。熊本県熊本市池辺寺跡は平安時代に創建された古代山岳寺院である。これまでの発掘調査成果により、平安時代の遺物が出土しており、複数の礎石建物跡が確認されている。池辺寺の中で西に位置する百塚地区では、礎石建物跡群とその背後にある約100基の石組遺構が並んでいる。これらの石組遺構は文字資料により「百塔」であることが確認されている。その石組遺構群の南西隣に、中寺廃寺跡例に類似する石組遺構SS-104・105・106が確認されている。これらの遺構は一辺2.0~2.1mの方形を呈する遺構である。石組の外周には約10~80cmの大ぶりな石を並べ、内部には小さな石が目立つ。側壁部分は現状では1~2段に高さ約30~40cm程度直に積み上げられている。周囲には転落したと思われる石が点在しており、石組遺構は本来もっと高く積みあげられていたと考えられる。石組遺構の四隅の石は直角となるよう整形されており、また外周の石の外側も加工し面調整を行っている。石組遺構周辺からは土師器杯などが出土している。

中世の石組遺構としてはその大多数が集石墓である。香川・徳島の集石墓を概観すると、土坑



1. 棕色10YR4/4砂質土（マンガン粒、炭化物を若干含む）
2. にぶい黄褐色10YR4/3砂質土（炭化物を若干含む）
3. 黄褐色2.5Y5/4砂質土
4. 黄褐色2.5Y5/4砂質土
5. オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土

第16図 古代・中世の石組遺構

内に石を充填するもの、下部に土坑を有するもの、石組内部に盛土を有するものなど集石墓の構造は様々である。その中で中寺庵寺跡と完全に近い構造を持つ遺構は確認できなかった。ここでは中寺庵寺跡で確認した石組構造に比較的近い上部構造を持つ、徳島県古城遺跡土坑墓 ST1001 を提示する。ST1001において確認された石組構造は約 1.3×約 1.1m の長方形を呈する。外周には約 10~40 cm の大ぶりな石を並べ、内部には拳大の石が目立つ。外周の大ぶりな石の下部に土坑の堀りかたがあるため、土坑に土を充填した後、大ぶりな側壁を組んだと考えられる。また、内部の拳大の石の下位には側壁の石と同様な石があり、その下位は土坑埋土となる。

香川・徳島県内の集石墓では内側に石のみを充填する事例は見られず、側壁を直に積み上げる事例も見当たらない。一覧表を用い比較すると中寺庵寺跡の石組構造は、中世よりも古代の状況に近いと考えられる。よって中寺庵寺跡の石組構造は古代のものである可能性が高い結果となつた。

遺跡名	中寺庵寺跡	池辺寺跡	古城遺跡
遺構名	C地区 石組構造 1~16	百塚地区C地点 SS-104・105・106	ST1001
四隅の石	特に加工せず	石を加工し、角をしっかりと作る	特に加工せず
基底石	外周を方形に積む、内側には板石を敷き詰めた基底面があるものとないものがある	外側は方形に積み、外周の面は加工した石によりそろえる	外周を方形に積む。内側には板石を敷き詰めた基底面があるものとないものがある
側壁構築方法	基底石上に 3~4 段程度ほど直に積み上げる	基底石上に直に石を積み上げる	側石は 1 石のみ
内側の石	小さな石のみ。積み方に規則性なし	大きな石と小さな石が混在する	盛土を充填した上部を礫で覆う
平面形	一边約 0.9~1.6m 四方の方形を呈する	一边約 2.0~2.1m 四方の方形を呈する	約 1.2×1.5m の長方形を呈する
立地	東へ降る緩斜面に位置する	東へ降る緩斜面に位置する	
方位	周辺地区的寺院建物を意識する	側辺が方位に合致する、同時代の礎石建物跡に隣接する	
遺物	性格を示す遺物出土せず	塔部材、灯明皿出土	土師器杯、鉄製馬具、人骨が出土
盛土	なし	なし	石組内部に盛土を施す
内部・下部遺構	なし	なし	土坑を確認

第 5 表 中寺庵寺跡石組構造と古代・中世の石組構造

④ まとめ

以上中寺廃寺跡C地区で検出した石組遺構の構造・遺跡内での位置の検討、中世・古代の類例との比較を行った。その結果、

①石組遺構の構造の分析からは、下部に伴う遺構はなく何かの構造物の基礎とも考えにくい。

よって、石組遺構単体で意味を成す遺構であると考えられる。

②石組遺構の角度は平安時代に中寺廃寺跡の建物が所在したA・B各地区を向く2グループに分類でき、各地区を意識して構築したものと考えられる。

③石組遺構の構造を古代・中世の石組遺構と比較した結果、古代の石組遺構で類似する例を確認し、古代の遺構である可能性が高いと考えられる。

以上のことから、C地区で検出した石組遺構は古代山岳寺院中寺廃寺跡の一部を成す古代の遺構であると考えられる。石組遺構の性格としては、池辺寺跡で確認されたような塔跡が造塔供養として構築された可能性が考えられる。また、石組遺構の基盤層中から10世紀代の須恵器が出土していることも石組遺構は古代の遺構であることを裏付ける。

(2) 中寺廃寺跡C地区で確認した石組遺構に関する検討 その2

① はじめに

今年度、中寺廃寺跡C地区の発掘調査で、人頭大と拳大の安山岩の角礫で構築された石組遺構を合計16基検出した。これらの石組遺構は、笹の多尾から北北西に延びる尾根から左右にいくつもの尾根が派生する中で、標高740mあたりから北西方向と東方向に分岐して延びる二つの尾根に挟まれた最奥部（馬蹄形を呈した部分の最奥部）に位置する。石組遺構の位置するこの最奥部を、周辺の地形も含めて詳細に見ると、北側と南側に前述した尾根があり、その間のほぼ中央部に北西方向に低い尾根が延びる。最奥部はそれによって二分され、両側は緩やかな傾斜の谷状を呈した地形となる。石組遺構は尾根からの傾斜角度が約24°とやや急な傾斜地と南側谷部の傾斜角度が約10°の緩やかな傾斜地、部分的には平坦地と認められる部分で検出している。

検出した石組遺構は16基であるが、発掘調査を実施し、詳細が判明したのはその内3基で、緩傾斜地に位置するものである。これら3基の石組遺構は発掘調査の結果、詳細な構築位置、構築方法、規模（高さは不明）は判明したものの構築時期については共伴する遺物が少量であったため、時期の確定には至っていない。

これらの石組遺構は平面形態が方形を呈し、規模は基底部の一辺が1.0～1.6mを測り、概ね1.0m程度のものと1.6m程度のものとの大小に分けられる。構造は四方向の側面（側壁）に、人頭大（20～30cm）程度の安山岩の角礫を小口積みするが、面調整を行っていないため、外側はやや

凸凹のある面となっている。人頭大の角礫で周囲（側壁）を造った後に、内部に拳大（7～15 cm）程度の安山岩の角礫を充填している。側面の構築はほぼ垂直に人頭大の角礫を積み上げているが、積み上げ時の休止面等の規則性もなく、乱雑に積み上げていることが解る（詳細は本文参照）。現存では3段程度積み上げていることが確認できるが、周間に転落した転石を全て使用したとしても、おそらくこの石組遺構の構築高はさほど高くなく、推定50～60 cm程度と考えられる。また、石組遺構に使用されている安山岩角礫は、基盤層に多量に含まれており、周囲から容易に入手可能である。

石組遺構及び周辺から出土した遺物は少量で、石組遺構を構築する基盤層（第4図I-I'間②層）から、9～10世紀頃と考えられる須恵器壺片、土師器椀片が、石組遺構の内部から近世～近代にかけての染付磁器が出土している。石組遺構は安山岩の角礫のみで構築しているために、包含層がなく、出土遺物から時期決定するには難しい。また、内部の角礫には隙間があり、後世の遺物の転落も考えられ、近世～近代にかけての遺物が出土していることから、その時期に構築されたものと考えるのには注意を要する。

当初、この石組遺構はA・B地区で検出した塔跡、仏堂跡、僧房跡などと同時期のものと考え、墓・石塔の可能性も考慮し、発掘調査を実施した。しかし発掘調査の結果、石組内部に骨蔵器、あるいは骨片、赤変した礫等も出土していないことや石塔に関係する石造物も出土していないことから墓・石塔の可能性も低い結果となった。

そこで、再度C地区で検出した石組遺構を詳細に検討すると下記の疑問点が考えられる。

- ①前述した地形の中で、南西側の緩やかな谷部を中心に（南西側の谷部のみに）石組遺構が立地していること。
 - ②平面的及び垂直的な分布でも、纏まりもなく分布していること。
 - ③石組遺構の基底部一辺の方位が一定していないこと。
 - ④傾斜面に構築するのであれば、その一辺は等高線に平行に構築するものと考えられるが、等高線に斜交するものもあり、等高線に規制されていないこと。
 - ⑤石組遺構の側面は人頭大の安山岩角礫で、3～4段、垂直に小口積みされているが、かなり隙間もあり、雑であること。仮にこの構築物が基壇状のものであれば、上部には重量の軽いものが、設置されていたこととなる。
 - ⑥内部の拳大角礫も規則性なく、乱雑に充填していること。
 - ⑦石組遺構内部及び周辺から近世～近代の染付磁器が出土していること。
- 以上のことから、ここでは古代の中寺廃寺跡とは関係のないものとして、異なる視点でその性格を考察することとした。

② 石組遺構の性格についての一つの仮説

ここでは神聖な土地である山に入り、木材の伐採や火を使用する木炭生産などの山に関係する作業を生業とする人々が山の神の怒りを鎮めるために「山の神」を祀る。石組遺構はその「山神」を祀る祠を安置する基壇ではないかという総手の元に検討したい。

旧琴南町は、自然林が多く、木炭の原本が豊富であるという立地条件と山間僻地で他の産業があまり盛んでなかったことから山間部でできる作業、特に木炭生産が主要な産業であった。明治になって木炭生産が盛んになり、戦後の最盛期（1950頃）には香川県の全消費量45万俵の3分の1に当たる15万俵を生産していた。

中寺廃寺跡A～D地区は、まんのう町（旧琴南町）大字造田字中寺に位置する。ここは天川神社から南方向に流路を取る柞野川に添つてある谷筋の奥になる。この谷筋のほぼ中程に柞野集落があり、これより奥が本谷と呼ばれ、この本谷からいくつもの谷筋が左右に延びる。ちょうど中寺廃寺跡があるA～D地区は、この本谷の西側に位置し、手前に松池（まつじ）谷、奥には中寺谷があり、ちょうど中寺谷の最奥部に中寺廃寺跡の中心部分であるA地区は位置している。

この柞野集落の「柞野（くにぎの）」は、この地域に「くにぎ」という木がたくさん生えていたので「くにぎの」になったと考えられる。「くにぎ」は落葉広葉樹のブナ科コナラ属の「クヌギ」で、おそらく柞野集落周辺から大川山にかけての山間部は、「クヌギ」を主とした落葉広葉樹林の森であったと思われる。ブナ科のコナラ属（クヌギ、コナラ、アベマキ、ウバメガシ）は木炭生産の燃料林として利用される樹種で、これらは萌芽林であること、収穫までの期間が20年前後とかなり短いこと、落ち葉が肥料として利用できることなどの特徴がある。したがって「クヌギ」を主とした森林は、木炭生産にとって格好の場所だったと考えられる。

この中寺廃寺跡周辺を中心に踏査した結果、中寺谷などの谷筋を中心としてかなりの数の炭窯があることを確認した。この中寺谷は主谷の最奥部が中寺廃寺跡A地区になり、途中から南に延びる枝谷がC地区の南東部に延びることから、C地区は中寺谷の主谷と南に延びる枝谷に挟まれた尾根上の平坦地に位置していることになる。

これらの谷部で、現在確認している炭窯は75基で、表面観察では周間に石を築くものと土盛との2種類が確認できる。この谷部にある炭窯跡の分布を見ると、ちょうどC地区を挟む谷筋に、炭窯跡の密集度が高いことが解る。このことからC地区で検出した石組遺構が炭窯跡となんらかの関係があると考えても不自然ではない。

次に「山の神」との関係であるが、炭焼きは山に入り、木を伐採し、草を刈り、火を焚く。この炭焼きをする際に山を守り、山を司る神である「山の神」の許しを得てその守護を祈念し、神を祀った。これが山の神信仰で、琴南町誌によると琴南には山の神を祀っているところが特に多いのは、山村で山に入り、木を伐採し、炭を焼くのを職業にしていったからとある。

旧琴南町内の「山の神」は琴南地区の文化財保護協会の悉皆調査によると現時点で28箇所確認

されている。そのほとんどは各小集落に一箇所あり、それぞれの集落ごとの「山の神」の位置付けが可能と考えられる。現在ではこの山の神を祀る祠を設置する基壇も、切石を使用し整然と構築している。しかし、柘木集落の標高約700m付近にある山の神（写真1）は、一辺約1m、高さ0.5mの基壇上に木製の祠を安置している。

この基壇を見るとやや雑ではあるが、ほぼ垂直に構築されており、C地区で検出した石組遺構と類似する。標高もC地区で検出した石組遺構の標高とほぼ同じで、周辺で炭窯も確認している。また、本谷の奥、中寺庵寺跡D地区的南の尾根上に「山の神」を祀った祠を確認した（写真2）。この「山の神」は明らかに集落に付随するものではなく、文化財保護協会の天川神社宮司からの聞き取りでも、山での生業に伴うものとのことである。この「山の神」は石製で、主となる幹周りが約7mの檜（ハルニレ）の巨木が6本の幹に分かれた股の部分に安置されている。正面下部に「世話人名」、右側面に「明治29年」、左側面に「三月吉日」が刻印されている。この山の神は、昭和30年代までお祭りをしていたことを確認している。

このように「山の神」の基壇が現在でも確認できるが、内部まで詳細に解るものは確認していない。しかし、その構築を見ると平面形態は方形で、人頭大の安山岩角礫を使用し、雑に構築しているという共通性は認められる。また一方、周間に石組を伴う炭窯を見ても、築かれた石組（写真3）の隅部分は、しっかりと築かれているが、それ以外は外側に面を持つものの雑に構築されていることが解る。

このようにC地区で検出した石組遺構を「山の神」を祀る祠の基壇と考えた時、

- ①D地区南の尾根上で確認した「山の神」が集落から隔離し、炭焼き（山の生業）に伴うものであること。
- ②上記の「山の神」が炭窯の分布域の本谷を中心する部分で、最高所の標高約700mあたりに位置していること。これは中寺谷を中心とするC地区周辺の炭窯の最高所、標高約700mに立地すること同じ。
- ③旧琴南町内で確認した「山の神」を祀る基壇の構築が、人頭大の安山岩角礫を使用し、雑に造られ、C地区で検出した石組遺構の側壁の構築に類似すること。



写真1 柘木山の神

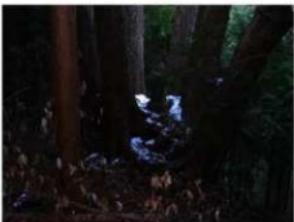
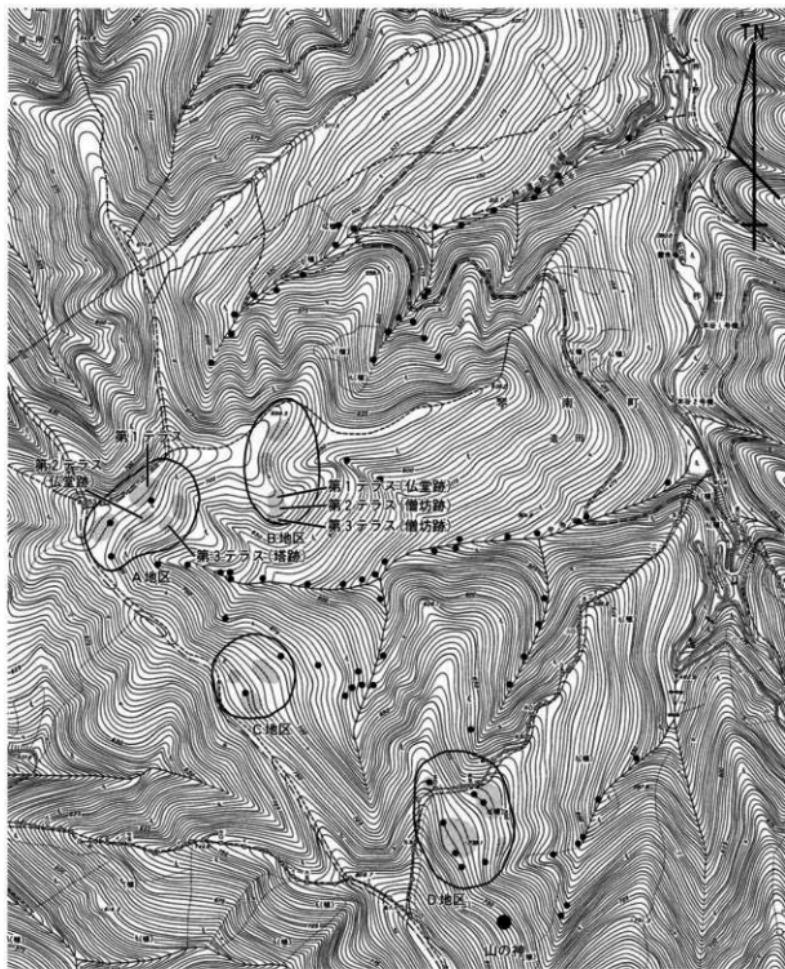


写真2 D地区近くの山の神



写真3 炭窯



第17図 中寺廃寺跡周辺の炭焼き窯分布図

- ④石組み遺構の側壁の構築が、近世～近代にかけての炭窯の側壁石組と類似していること。
⑤石組遺構内から炭窯による木炭生産の時期、近世後半から近代にかけての遺物が出土していること。

などから、C地区で検出した石組遺構を炭焼きに伴う山神信仰と関連付け、その祠を安置する基壇とした。また、石組遺構内から出土した近世～近代遺物も、この周辺で木炭生産が盛行する時期に合致する。

昭和30年代以前の日本では、食や住を支えるエネルギーの供給源の多くは薪炭で、昭和30年代以降、燃料としてプロパンガス等の安い科学燃料が普及したために、木炭生産は衰退する時期に、中寺廃寺跡周辺の木炭生産も終焉を迎え、山の神の祠も朽ち果て、あるいは持ち去られ、基壇のみが残ったものと考えられる。

③まとめ

以上中寺廃寺跡C地区で検出した石組遺構を、炭焼きに伴う「山の神」信仰の祠を安置する基壇と考えたが、推測の域を出ていない。また、昭和初期まで炭焼きを生業とした集落での聞き取りからも、炭窯に近接して、高所に「山の神」を祀った事例も、天川神社宮司以外に話を聞くまでは至らなかった。しかし、D地区南の尾根上で確認した「山の神」は基壇を伴わず、祠も石製であるが、明らかに山の生業に伴う「山の神」であることを確認したことは、C地区で検出した石組遺構の性格を考えるのに有効なものと考えられる。

しかし、当初の①～⑦の疑問点の内①・④についてとC地区で検出した石組遺構も約50mの範囲内に16基と複数あることなどの疑問点は依然として解消されないまま残っている。

C地区で検出した石組遺構がいつの時期に構築されたかは不明であるが、人為的な構築物であることには間違いない。「山の神」の祠を安置する基壇という仮説は、標高約700mの地に造られた石組遺構の性格を考える参考になればと思っている。

最後になりましたが、「山の神」の調査に際してはまんのう町文化財保護協会琴南支部の菅原良弘氏から、炭窯の踏査に際しては香川県埋蔵文化財センター小野秀幸氏、中山尚子氏から多大な協力を得たことを記して、感謝の言葉に代えたいと思います。ありがとうございました。

（3）石組遺構の時代・性格について

以上、検討（1）（2）においてあらゆる視点から検討を加えた結果、石組遺構について中寺廃寺跡の一部を成した古代の遺構とすることに妥当性があると考えられる。C地区的石組遺構が古代山岳寺院中寺廃寺跡の一部の成すことを踏まえることで、中寺廃寺跡は同時代に建物が展開したA地区（仏堂・塔を有する中心部）、B地区（仏堂・僧房を有する修行と生活の場）、C地区（石

組遺構を有する祭祀的な地区）といった別機能を担う地区が谷を挟んで対峙する状況が確認できる。他県の古代山岳寺院を見ると、熊本県熊本市池辺寺跡では仏堂跡・僧房跡と考えられる礎石建物跡・塔跡・石組遺構・祭祀遺構など、静岡県湖西市大知波峠廃寺跡では仏堂跡・僧房跡と考えられる礎石建物跡や掘立柱建物跡・池跡・巨石などが確認されており、寺院内において生活空間である僧房、修行の場である仏堂、祭祀のある石組遺構・巨石などといったあらゆる機能をもつ施設が谷を挟んで向かい合う状況が認められ、この状況は古代山岳寺院の特徴であることが確認できる。従って、中寺廃寺跡は古代山岳寺院の特徴を良好に示す重要な遺跡といえる。

（4）香川県内の古代山岳寺院から見た中寺廃寺跡

① はじめに

日本に仏教が伝わったとされる6世紀初頭以降は主に畿内中心部において寺院が建造されるが、大化の改新によって律令国家の基礎が確立したとされる白鳳時代に入ると、香川県内において寺院が建立されるようになる。菅原道真が記した『菅家文書』によると、平安時代の香川県内には官寺が28ヶ寺存在したとされている。この数は四国内において卓越しており、香川県は四国における古代仏教の先進地であったと考えられる。現在、香川県遺跡地図に掲載されている古代寺院遺跡は約60ヶ所であるが、他に伝承地なども含めるとその数は多数にのぼり、今後の調査によって増加していくものと考えられる。県内の平安時代に属する平地寺院としては、白鳥廃寺・極楽寺跡・願興寺・下司廃寺・高野廃寺・押拌廃寺・坂田廃寺・勝賀廃寺・百相廃寺・讃岐国分寺・讃岐国分尼寺・開法寺跡・鴨廃寺・醍醐寺跡・法懸寺・宝幢寺跡・田村廃寺・仲村廃寺・善通寺・道音寺・妙音寺・高屋廃寺・大興廃寺・紀伊廃寺が確認されている。山岳寺院としては、中寺廃寺跡・千間堂跡・中山廃寺が確認されている。中山廃寺と讃岐国分寺出土の軒丸瓦には文様の類似性が見られ、中山廃寺が讃岐国分寺の付属的施設である可能性が指摘されている。このように古代仏教においては、平地に所在する寺院と山中に所在する寺院の交流が盛んであり、僧侶は山中で修行を行うことで始めて法力を得ることができたとされる。近年の研究では天台宗・真言宗などの密教が浸透する以前から山岳修行は行われていたことが指摘されている。従って古代山岳寺院の研究は、香川県内の初期仏教文化を解明する上で、不可欠であると考えられる。

② 香川県内の古代山岳寺院

近年、香川県内において山岳寺院の調査が進み、徐々にその姿が明らかになりつつある。県内における平安時代から中世にかけての山岳寺院は未発掘の遺跡も併せて17ヶ所確認されているが、その他にも現存する山岳寺院のうち起源が遡る寺院や、山岳寺院が所在したとされる伝承地

が多数存在し、今後の詳細な調査によりその数は増加していくものと思われる。現在までの調査により山岳仏教草創期の古代に遡る山岳寺院として認められるものはまんのう町中寺廃寺跡、高松市千間堂跡、同市中山廃寺が上げられる。高松市千間堂跡においては土壇をもつ礎石建物跡を中心に数棟の掘立柱建物跡が確認されている。高松市中山廃寺も礎石が確認されていることから、同様の小規模な伽藍配置をもつ寺院であったと考えられる。千間堂跡は11世紀末～12世紀初頭頃に近くへ移動して屋島寺として再整備され、中山廃寺も同時期に近くへ移動して根来寺として再整備されたと想定されている。古代の各寺院の状況からは9世紀における山中の利用、9世紀後半～10世紀前半における寺院建物の建立の開始、12世紀における寺院の廃絶・再整備・移転といった3段階の画期が想定されている（渡部2006）。

③ 県内の古代山岳寺院における中寺廃寺跡の意義

これまでの調査成果を基に、県内の古代山岳寺院から見た中寺廃寺跡の意義について考察する。まず県内の古代山岳寺院の位置に着目する。高松平野の北東部に所在する屋島山上、標高約285mに高松市千間堂跡が、高松平野西部の五色台山塊北東部丘陵上、標高約355mに中山廃寺が所在し比較的平野部に近い山中に立地しており、平地寺院の付属施設として成立した可能性が高いと考えられる。それに対して中寺廃寺跡は香川県の南端を画する讃岐山脈から北西に派生した尾根上、標高約700mの平野部から離れた山中に立地しており、中寺廃寺跡は他寺院の付属施設として成立したのではなく、独自の要因によって成立したと考えられる。中寺廃寺跡が所在するまんのう町と吉野川中流域北岸は、古墳時代後期における段の塚穴型石室の分布、白鳳時代における郡里廃寺と弘安寺跡の同范する法隆寺式軒丸瓦、近世における借り耕牛の交流があり、讃岐山脈の峠を介した交流が深い地域である。中寺廃寺跡付近の尾根は近代においても、香川県・徳島県間の交通が盛んであったことを聞き取り調査により確認している。このような交流を背景に中寺廃寺跡は阿波・讃岐の国境付近に立地したと考えられる。また、中寺廃寺跡は古くから信仰の対象となっていた大川山に向かって開けた谷に立地しており、山岳信仰の面からも重要な遺地であると考えられる。

次に寺院の規模について着目する。高松市千間堂跡や中山廃寺は礎石建物1棟の付近に掘立柱建物が数棟付属する小規模な寺院と想定されている（渡部2006）。それに対して中寺廃寺跡は同時代に建物が展開したA地区（仏堂・塔を有する中心部）、B地区（仏堂・僧房を有する修行と生活の場）、C地区（石組造構を有する祭祀的な地区）といった別機能を担う地区が谷を挟んで対峙する状況が認められ、県内の古代山岳寺院と比べて大規模な寺院であることが確認できる。

次に中寺廃寺跡から出土した須恵器多口瓶に着目する。多口瓶は寺院遺跡を中心に出土する仏具と考えられる遺物で、県内山岳寺院においても高松市千間堂跡から出土している。千間堂跡出土の多口瓶は近隣の綾川町に所在する十瓶山窯跡群において焼成されたと考えられている。それ

に対して中寺廃寺跡出土の多口瓶は兵庫県相生市に所在する窯跡群で焼成された事を確認している。従って出土した遺物からも、中寺廃寺跡が広範囲との交流を持っていたことが確認できる。

また中寺廃寺跡からは中国浙江省越州窯系青磁碗精製品（I類）が出土した。当時の青磁は国府や大規模な港など、国内の拠点施設で出土する貴重品である。古代山岳寺院において確認された例は全国的に見ても希少であり、中寺廃寺跡が他の山岳寺院と一線を画する状況が確認できる。

古代山岳寺院の間には法会・修行などの僧侶の往来により氏族的な結びつきを超えたネットワークが形成されたとされ（上原 2002）、このネットワークを背景に遠方から多口瓶や青磁が中寺廃寺跡へ持ち込まれたと考えられる。また、中寺廃寺跡出土多口瓶の製作年代は9世紀中～10世紀前半であり、越州窯系青磁碗は9世紀後半以降日本国内で流通する遺物である。この時期は香川県内に山岳寺院が建立され始める9世紀後半～10世紀前半とほぼ合致しており、瀬戸内海を越えた広範囲のネットワークが香川県内への山岳寺院建立の背景に介在していたと考えられる。

④ まとめ

以上、中寺廃寺跡について県内に所在する他の山岳寺院との比較検討を行った結果、

- ①平野部から離れた阿波・讃岐国境付近に立地しており、平地寺院の付属施設である県内の他の山岳寺院と違い、独自の要因により成立したと考えられる。
- ②別機能を担う地区が谷を挟んで対峙しており、県内の他の小規模な山岳寺院と異なり大規模な山岳寺院である。
- ③相生産多口瓶、越州窯系青磁碗といった遠方の地域から搬入した遺物が出土しており、非常に広い地域との関わりがあったと考えられる。

以上のことから、中寺廃寺跡は県内で確認された他の寺院とは立地・規模・遺物の面で大きく違う特徴が確認できた。中寺廃寺跡からは讃岐山脈を経由して箸蔵寺・雲辺寺・中蓮寺・大庭寺などの讃岐山脈沿いの山岳寺院、また遠く高知県・愛媛県へと尾根を介しての交通が行われていた可能性があり、中寺廃寺跡は他の山岳寺院と一線を画す、四国の拠点的な古代山岳寺院であったといえる。

参考文献

- 進藤政量 1799 「讃岐廻遊記」(1943『香川叢書』第3巻所収)
- 上原真人 2002 「古代の平地寺院と山林寺院」『佛教藝術 265 特集山岳寺院の考古学調査西日本編』
佛教藝術學會
- 渡部明夫 2006 「高松市中山庵寺について～香川における初期山岳寺院とその仏堂～」『香川県埋
蔵文化財センター研究紀要II』香川県埋蔵文化財センター
- 1975 『満濃町史』満濃町
- 1976 『綾歌町史』綾歌町
- 1986 『琴南町誌』琴南町
- 1988 『香川県史第1巻 通史編 原始・古代』香川県
- 1988 『県道府中・琴南線改良工事に伴う備中寺遺跡発掘調査報告書一付・中寺庵寺確認調査概報
-』琴南町教育委員会
- 1991 『炭所西生産森林組合史』炭所西生産森林組合
- 1994 『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第8集 四国縦貫道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
8 古城遺跡』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター・日本道路公團
- 1995 『兵庫県文化財調査報告 第139冊 山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告XIII 相生市・緑ヶ
丘窯址群II』兵庫県教育委員会
- 1996 『池辺寺跡I (百塚遺跡C地点・堂床遺跡発掘調査報告書)』熊本市教育委員会
- 1997 『湖西市文化財調査報告第37集 大知波岬庵寺跡確認調査報告書』湖西市教育委員会
- 1999 『池辺寺跡II (平成8・9年度発掘調査報告書)』熊本市教育委員会
- 2000 『第3回揖河泉古代寺院研究会フォーラム 山岳寺院の考古学』揖河泉古代寺院研究会
- 2001 『池辺寺跡III (平成10・11年度発掘調査報告書)』熊本市教育委員会
- 2002 『池辺寺跡IV (平成12年度発掘調査報告書)』熊本市教育委員会
- 2003 『池辺寺跡V (平成13年度発掘調査報告書)』熊本市教育委員会
- 2003 『高松市埋蔵文化財調査報告 第62集 史跡天然記念物屋島』高松市教育委員会
- 2004 『中世墓資料集成－四国編－』中世墓資料集成研究会
- 2005 『琴南町内遺跡発掘調査報告書第1集 中寺庵寺跡 平成16年度』琴南町教育委員会
- 2006 『琴南町内遺跡発掘調査報告書第2集 中寺庵寺跡 平成17年度』琴南町教育委員会